「オネエ所長の調査ファイル」
＃１９

山崎浩治

「オネエ所長の調査ファイル」＃１９

１

「所長は子どものころ、どんな遊びをやってました？」
「リカちゃんやバービー人形でおままごとするのが好きだったなあ。愛読書は〝リボンの騎士〟よ」
「手塚治虫のマンガですね」
「主人公は王子様として育てられたお姫様。まるであたしみたいでしょ？　男と女の２つの心を持つ彼女は、憧れの人だったの。ねぇトオルちゃん、リボンの騎士の主人公の名前を答えられたら、オネエ検定２級を認定してあげるわよ！」
「そんな認定いりません！　だいたい何がリボンの騎士ですか！　〝ズボンのシミ〟みたいな顔して！」
「金沢プライベート・リサーチ」のオネエ所長、市山とイケメン調査員の透が金沢市に住む会社員・悠太(28歳)を張り込んでいる。専業主婦の妻・沙織(29歳)から「夫に多額の借金があるようだ。借金の原因を調べてほしい。ギャンブル癖などがあるなら離婚を考えたい」と相談を受け、身辺調査を行っているのだ。この日の市山はキャミソールに薄手のカーディガンで女装し、すっかり夏の装いとなっていた。
　依頼人夫婦は２年前に職場結婚、現在は市内の賃貸マンションに住み、１歳になる息子がいる。平穏な暮らしを送っていたものの、半月前、悠太に届いた消費者金融会社の督促状で借金が発覚した。会社から帰宅した夫を問い詰めると、「３００万円ほど借金がある」と白状したが、借金の原因については口をつぐんで答えなかった。調査の結果、悠太は会社と自宅を往復する絵に描いたような真面目人間であることが確認された。
「ギャンブルどころか、酒もタバコも女もやらない。浪費家でもない。それなのにどうして３００万円も借金作っちゃったんでしょう？」
　首を傾げる透に、市山が言った。
「借金の原因はギャンブルや浪費だけじゃないわ。生活費を補てんしているうちに〝借りては返す〟の悪循環に陥り、借金が膨れ上がることだって珍しいことじゃない。夫婦が結婚した時、挙式や新婚旅行でお金がかかったのかもね」

２

「サラ金５社に銀行のカードローン、信販系を加えて借金総額はざっと５００万円。それに対して、ご主人の年収は３００万円程度。あなたが働きに出るにしても、返済はかなり厳しそうね」
　数日後、メンズスーツ姿の市山が「金沢プライベート・リサーチ」に沙織を呼んで調査報告している。

「さて、そうなると借金整理を考えなきゃ。能登にいるご主人のお母さんはパートを掛け持ちしながら女手一つで息子を育てたそうだから、借金の肩代わりは難しいでしょう。あなたの実家は援助してくれるかしら？」
「うちはサラリーマン家庭なので、そんな大金、とても無理です」
「残された手段としては任意整理や個人再生、自己破産などがあるわ。だけど、結論から言えば、めぼしい財産のないご主人の場合、自己破産がベストだと思う」
「自己破産すれば、借金が全部免除されるんですか」
「ううん。自己破産したからって借金がチャラになるわけじゃないのよ。裁判所から免責許可をもらって初めて借金が消えるの」
「自己破産したら夫の会社にバレてしまうんじゃ‥‥」
「自己破産の事実は官報に記載される。でも、あなたは一度だって、その官報を見たことある？
　そこから誰かにバレるなんて通常あり得ないの」
　沙織が安堵の吐息を漏らした。
「もちろん、デメリットもあるわよ。一度、免責を受けると７年間は再び自己破産できないし、信用情報機関のブラックリストにだって名前が載るわ。だけど借金をリセットして、新たなスタートを切れるのだからメリットは大きいはずよ」
　依頼人夫婦は早速、弁護士に依頼して自己破産の手続きに着手した。ところがその矢先、悠太が勤め先に辞表を提出、沙織には「やっぱり自己破産できない」とＬＩＮＥにメッセージを残して失踪した。沙織から連絡を受けた市山が声を上げた。
「心機一転やり直すって時に、どうして会社を辞めて家出なんかするのよ！」

３

「正社員として就職するなら大卒」と考え、県外にある私大に進学した。悠太が小学生の時に離婚した母親はパート勤めで、とても学費を負担することができなかったけれど、「社会人になれば何とでもなる」と大学卒業までに毎月12万円の奨学金を借りることにした。有利子タイプの奨学金だったから、利子を含めた返済総額は６００万円以上。大学卒業後に始まる月々の返済は３万円弱で、20年間で完済する計算だった。奨学金では学費しかまかなえなかったため、学生時代はアルバイトで生活費を毎月10万円近く稼いでいたので、奨学金の返済など楽勝に思えた。
　就活では地元に戻って正社員として就職できればいい、と高望みを捨てた。業種を問わず企業を回り、４年秋に決まったのがいまの会社だ。ところが社会人になってみると生活の苦しさは想像の斜め上をはるかに超えていた。家賃に食費、携帯電話代、それに奨学金を返すと手元にはほとんど残らなかったからだ。
　奨学金で苦労しているのは悠太だけではないらしく、「奨学金返済中を理由に、交際相手の親が結婚に反対している」とグチをこぼす大学時代の友人がいた。会社の先輩は「奨学金を返し終わらないうちに、ボウズの塾代がかかってきたよ」と冗談めかしていたが、その目は笑っていなかった。「返済期間中に失業や病気をしたらアウトだな」と真顔で語る同僚もいた。

　社内で知り合い、交際を始めた沙織との交際費用や生活費の補てんとして、最初のうちは銀行のカードローンや信販系のキャッシングでやりくりしていたが、結婚式や新婚旅行、新居の費用でさらに金が必要となり、サラ金に手を出したあたりで借金が一気に膨れ上がった。気がつけば、返済のために金を借り、その返済のためにまた借りるという自転車操業に陥っていた。
　やがて新たな借り入れが困難になり、返済に行き詰まった時、借金の存在が明るみになった。「自己破産すれば借金はなくなるよ」と沙織は言ったが、ことはそう単純ではない。奨学金を申し込む際、母親と伯父に連帯保証人になってもらっていたからだ。母親から「伯父さんにはくれぐれも迷惑をかけないで」と涙ながらに訴えられていたので、なんとしても自己破産するわけにはいかなかったのである。

４

「奨学金と言っても返済が必要なものは実質的に学生ローンと同じ。自己破産して免責の許可が下りれば、通常の借金と同じように返済の必要はなくなるの」
「金沢プライベート・リサーチ」で市山と透が話している。
「けれど依頼人の夫は母親と親戚に連帯保証人になってもらっていたから、自分が自己破産しても、連帯保証人に支払い義務が残ってしまう」
「それで追い詰められた夫は何もかも放り出して逃げ出してしまったわけね」
　そこへ善後策を協議するため、沙織が母・真由美(52歳)を伴って事務所にやってきた。
「奨学金のことを結婚前に教えてくれれば、そのつもりで結婚したし、子どもだって産む時期を遅らせて、一緒に働いて返済できたんですけど‥‥」
　沈痛に語る沙織の傍らで、真由美は不機嫌を隠さなかった。
「夫が学生の時に作った借金なんて、あんたに関係ないわ。奨学金のことが分かっていたら結婚させなかったのに！」
「そんなこといまさら言ったって仕方ないでしょ！」
　親子の言い争いに市山が割って入った。
「内輪もめをやってる場合じゃないわよ。それより、あなたはご主人の借金に関して連帯保証人になっていないの？」
「はい」
「よかった。それならあなたに返済義務は一切なし。もしもサラ金業者から肩代わり返済を求められても、きっぱりと断りなさい」
　真由美がやれやれというように、ため息を漏らして沙織に言った。
「夫が行方不明じゃ離婚もできない。いっそ黙って離婚届を出しなさいよ」
「ちょっとお母さん！　自分の娘に犯罪をそそのかしてどうすんの！」
　市山が釘を刺すと、真由美が決まり悪そうに黙り込む。市山が言葉を継いだ。
「でもね、本気で離婚を望むなら奥の手があるのよ」

「法律では配偶者が〝3年以上生死不明〟の場合、離婚原因にあたると規定してる。その一方で、法律は夫婦の同居を義務づけてるの。借金が原因で家出して、生活費も送ってこない夫は明らかに法律違反よね。そこで〝悪意の遺棄〟、つまり、〝婚姻を継続しがたい重大な事由〟として離婚裁判を申し立てるわけ」

依頼人親子が真剣な眼差しで耳を傾けている。

「裁判の前には本来、調停が必要なんだけど、相手が行方不明の場合、調停を開いたって意味ないから、いきなり裁判を開くことができるのよ」

市山の助言を受けた沙織はすぐさま、弁護士に依頼して離婚裁判を申し立てた。夫の住所が不明として裁判所での掲示によって訴状が相手に届いたとみなす「公示送達」の手続きを経、夫婦の離婚が認められたのは数カ月後のことだった。

沙織は子どもを連れて実家に戻り、両親の援助を受けて暮らしている。悠太の消息はいまも分からないという。「金沢プライベート・リサーチ」で市山と透が調査を振り返っている。透が感慨深げにつぶやいた。

「社会に出る段階で多額の借金を背負い、返済に汲々としている人はきっと依頼人の元夫だけじゃないんでしょうね」

「より高い教育を受けることが、より安定した職業につながる。そう考えて奨学金を借りるのはいまや、先行投資というよりも、ギャンブルに近いのかもしれないわね」

「将来、奨学金に見合った収入が得られればいいけど、下手をすれば借金だけが残ってしまう‥‥」

小指を立てながら紅茶を飲む市山が口調に悔恨をにじませた。

「奨学金が借金の端緒だったことにあたしが気付いてれば、もう少し何とかできたかもしれない。自己破産をして免責許可を得たのち、連帯保証人の親戚だけには返済を継続するとか、方法はいくらでもあったのに。後悔しちゃうわ」

「所長でも後悔することがあるんですね」

「そりゃあ、あるわよ。あたしの人生から後悔をとったら何も残らない。その後悔を忘れるために、女装してるって言っても過言じゃないもの」

「所長は女装そのものを後悔した方がいいと思いますけどね！」

それから半年後、沙織が「金沢プライベート・リサーチ」に現れた。元夫から沙織の実家へ現金書留で50万円が送られてきたが、どうしたらよいかと相談しに来たのだ。宛名には沙織の結婚時の姓を記してあったから、悠太は離婚したことをまだ知らないらしい。

「神様からのプレゼントだと思って、ありがたくもらっておきなさい」と市山からアドバイスされた沙織が事務所を後にする。見送った透が明るい声で言った。

「元夫はどこかでマジメに働いているんですね。ちょっと安心しましたよ」

しかし、市山の表情は険しかった。

「借金を踏み倒して行方不明になっている人間がまともな社会生活を営めると思う？　犯罪に手

を染めてなきゃいいけどね」